

氏名(本籍)	湯澤規子(長野県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2077号		
学位授与年月日	平成16年12月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	結城紬生産地域における家族の役割とその変化 －ライフヒストリーからみた暮らしの論理と紬生産－		
主査	筑波大学教授	理学博士	石井英也
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	伊藤純郎
副査	筑波大学助教授	文学博士	小口千明
副査	筑波大学教授	農学博士	佐藤常雄

論文の内容の要旨

本論文は、結城紬生産地域の存立を、家族内分業のあり方とその変化から解明しようとしたものである。本論文の特徴は、結城紬生産にかかわる史資料の収集はもちろんのこと、口述に加え、織り手が所有する「機織帳」や「紬の切れ端」からライフヒストリーを復原し、暮らし全体にわたる家族内分業の実態を明らかにすることを通して、結城紬生産地域の存立を検討しようとしたことにある。

第Ⅰ章「序論」は、従来の研究における問題点を整理し、著者の研究の視点と方法を明示している。つまり、従来の研究は家族内分業が結城紬生産地域の存立に関わってきたことを指摘しつつも、その実態を検討したものはなく、近代化への発展段階論のなかで遅滞地域として位置づけ、当地域の特殊性を見出してきたものがほとんどであった。それには家族内分業の実態を把握しうる史資料や方法が乏しい状況に加えて、従来の地理学では一人一人の人間が地域を説明しうる要素にはなりにくいとの認識があったという考えのもとに、著者は独自の方法論を展開している。

第Ⅱ章「結城紬生産地域の歴史的展開」および第Ⅲ章「結城紬生産地域の構造と地域特性」は、結城紬生産地域の歴史的展開と地域の特徴について検討している。第Ⅱ章はまず、江戸時代に起源のある結城紬生産が、他の織物生産地域に比して、機械化せずに一貫した手作業生産を徹底する独自の展開をみせるのは明治中後期であったこと、さらに多彩な緋柄などを考案し、現在の結城紬生産を特徴づける基盤が整ったのが昭和戦前期であったことを示している。結城紬は第二次世界大戦後に、他の織物生産地域の多くが衰退し始めるのに逆行して、脚光を浴びるが、それは伝統的技能を保持したことによって逆に付加価値や市場対応力が高まった結果であったことを指摘している。生産量は昭和55(1980)年頃まで、ほぼ安定的に3万反を維持続けたが、その後、減少の一途を辿るようになる。

第Ⅲ章は、地域内分業と家族内分業という二つの側面での紬生産における分業や、緋柄を指標とした生産の地域分化の実態を明らかにし、それらを束ねる中心的な役割を果たしている縞屋について検討している。縞屋が、各機屋の家族の状況や技能水準などを知悉し、多様な需要に応えるべく努めている様が描かれている。また、この章では結城紬生産地域の景観と暮らしの復原作業も行われている。

第Ⅳ章「暮らしの具体像からみた家族内分業の構造と論理」はまず、結城市大字中船戸坪を取り上げて、茨城県工業指導所が行った実態調査の調査個票と聞き取り調査をもとに、紬生産に従事経験のある11戸について、紬生産と家族構成・家族労働力の変遷との関係に関する予察を行っている。それを受けて第2節、第3節では口述に加えて、二人の織り手が所有していた「機織帳」と「紬の切れ端」からライフヒストリーを構成し、家族内分業の構造や技能の継承を支えるシステムについて検討している。その結果、家族内分業のあり方は、家族構成の推移と労働力構成の周期的律動にともなって絶えず変化すること、複合的な生業の組み合わせを伸縮・調整しつつ、代替可能な労働が家族構成員間で臨機応変に分業されることといった特徴をもつことを摘出した。このような家族内分業というシステムは、時間や人材の循環的な有効活用を実現させる仕組みで、家族内外の変化に対して柔軟に対応し、暮らしを円滑かつ持続的に営むことを可能にするものであった。また、家族内外の条件への対応は、経済合理性だけでは説明できない行動も多く含まれ、著者はこれらを「暮らしの論理」と解し、利益や生産効率を重視する大量生産の論理とは一線を画すものであったと主張している。

第Ⅴ章「暮らしの変化と紬生産地域への影響」は、一機屋における女性三代のライフヒストリーの比較を通して、家族の変化と結城紬生産地域の動向との関わりを考察している。第二次世界大戦後、結城紬は国の重要無形文化財の指定を受け、高度経済成長期の需要増もあって、安定した生産が続けられていたが、しだいに高級化をめざす傾向にあった。この傾向に対して生産者側は、高度な技能の組み合わせを模索し、多くの専業機屋や賃機が生まれ、生産地域の再編成がなされるようになった。このような動向は、高度経済成長期における雇用機会の増大などもあって、生産者側に利があるようにみえたが、落とし穴をも用意していた。家計収入や労働の季節配分などで紬の役割が増大したり、家族内分業のあり方が変化したりしたが、これらの変化は、柔軟で代替可能な家族内分業やそれに基づく技能の伝承といった旧来のシステムを崩壊させる芽を準備していたわけである。結城紬の生産は、昭和55(1980)年を境に急速に衰退に向かうが、それまで生産が安定的に推移していたため表面的には変化が捉えられなかった。しかし、実際にはその最盛期に生産構造の内部矛盾が発生していたのであり、著者はその様子を女性三代のライフヒストリーと関わらせて描いている。

第Ⅵ章の「結論」は、これまで述べてきたことを総括するとともに、著者の方法論の有効性や一般性について言及している。とくにここで著者は、本論文の方法論が平均的人間像を想定して地域の研究を進めてきた従来の地理学に対して、人々の生き方と関わらせながら地域を描くことが新しい知見をもたらすことや、結城紬生産地域に見られる家族経営は、日本の伝統的社会経済を特色づけてきたもので、各地の家族・産業・地域の相互関係や、それぞれの特徴や意味を考察する際に妥当性をもつことを主張している。

審査の結果の要旨

本論文は、結城紬生産地域の存立と盛衰を家族内分業のあり方とその変化から解明しようとしたものであるが、史資料分析、口述に加え、織り手が所有する作業記録や日記、備忘のために残しておいた「紬の切れ端」を手がかりにして、ライフヒストリーばかりでなく、紬生産と生活、それを取り巻く環境を丹念に復原し、その構造的関連、地域的・時代的意味を論じた作品である。地理学では地域性を考察する際に統計などで得られる平均的人間像を前提に議論を進める研究がほとんどで、生活に関する研究蓄積は実に少ない。この作品は、その隘路に切り込んだ意欲的な研究と認められる。家族内分業で維持されてきた結城紬生産と日常生活に関する具体像の提示は、従来の地理学では見出しえなかった新知見を提供したばかりでなく、地域記述を人の顔の見えるいきいきとしたものにしていく。本論文は、とりわけ第二次世界大戦後を中心として議論しているが、家族経営という生産のあり方は日本の伝統的な社会や経済で広く認められてきたもので、汎用

性にも富み、歴史地理学の研究において新地平を拓くものと、評価できる。

本論文は、完成度の高いものであるが、いくつかの課題も残されている。高度経済成長期を中心に扱っているにもかかわらず、その時代に関する正面切った議論が欠けていることや、第二次世界大戦後に続く結城紬生産地域の基礎が明治中後期から昭和戦前期に確立する理由の考察が欠けていることなどである。後者は、日本全体の織物生産地域における結城紬生産地域の位置づけに関する考察が不十分であったことにも関係している。しかし、これらの課題の解消には、より多くの調査・研究経験が必要で、本論のような緻密な事例調査を蓄積することが望まれる。本論文は、家族経営という観点から結城紬生産地域のあり方を問い直し、丹念な実証研究で地域に生きる人々の具体像を提出し、新しい方法と新知見を提示しえた意欲的作品であり、学界に大いに寄与する成果と評価することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。